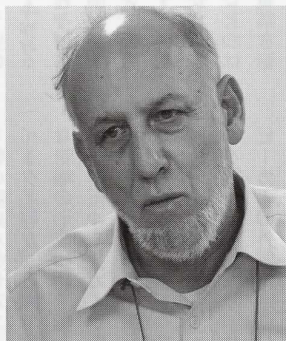


「真空管はそんなにヤワなものじゃありませんよ」

独自の回路設計で孤高の道を歩む真空管アンプの奇才

EAR：ティム・デ・パラヴィチーニ

聞き手◎角田郁雄



ティム・デ・パラヴィチーニ氏
Tim de Parquacini

私は、プライベートでは積極的にLP再生も楽しんでいるが、特に近年、そのときは真空管アンプを好んで使う。またCD再生に使っても、真空管の倍音豊かな音質は、実にアナログ的なテイストを感じさせる。そんななか、嬉しいことに10月に東京・有楽町で開かれたハイエンドショウで、真空管アンプで知られる英国EARの総帥、ティム・デ・パラヴィチーニ氏に会うことができた。

早速尋ねたのは、いつ頃からオーディオに興味を持ちましたかという、氏のオーディオ遍歴。「ナイジェリアの生まれで13歳くらいからオーディオに興味を持ち始めました。大きくなってからスタジオ機器の製作に関わり、1978年に、EARを設立したのです。当時、まずコンソルト的な仕事としてスタジオ用マイクアンプやスピーカーメーカーのアンプレなどの製作を行い、その後、自

社モデルを発売しました」とのことだ。

真空管回路への考えについては、「電源にしてもアンプ回路にしても、とにかくオリジナリティが大切だと思います。1000kHzでマイナス4dBなどというところでもない高域特性を得ようなんて、真空管アンプではだれも考えないし、追求しようとも思わないでしょう。それでいい。真空管の耐久性について、EARモデルでは5年間、調整などのサービスをしなくともいように設計しています。そもそも真空管はそんなにヤワなものではありませんよ」とはつきり言い切るところはすごい。

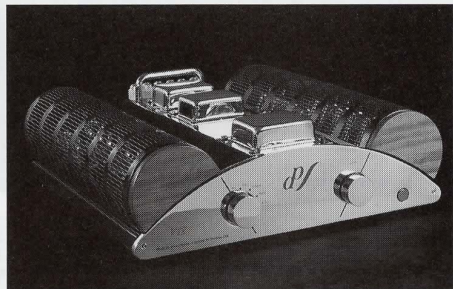
いちばんのお気に入り アナログのマスターテープ再生

自社モデルを発売する一方、クオードでは現在のフォノイコライザー等の回路設計にも協力されていますねと聞くと「私はクオードの創始者ビーター・ウォーカーと親交を持っていましたし、格別に尊敬もしています。その点で、自分でも適任者だと思えます」という答えが返ってきた。

私は最新の同社DAC、DACute音質が、どこかアナログテープ再生のような感じになるところが気に入っている。ご自身は普段どんなメディアを聴いているの

His Work

パラヴィチーニ氏の作品



EAR V12

EL84というポピュラーな真空管を12本使い、出力50W+50Wを得るプリメインアンプ。英国時代のジャガーが生んだ名車、XJ12の存在感、たとえば乗り心地や操縦性の味わいをイメージした、パラヴィチーニ氏の最新作。そのたまたまは独特でエレガント、雰囲気もたっぷりである。94万2,900円

■問：ヨシノトレーディング(株) TEL.050-3375-3975

かというところ、「一番多いのはテープ再生、次がレコード、その次がSACD、CDですね。DACuteはウォルフソンのDACチップを使い、スタジオのアナログテープレコーダーの音質を狙いました」とのこと。開発時は、どんな音楽を聴くのかと質問すると、「ジャズを聴くことが多いかな。開発ですから聴きたくない音もあえて聴くこともあります」とのこと。そして、「次の発想を待つ」とのこと。

使用する真空管はスロバキアのJJ、ロシアのエレクトロ・ハーモニックスが多く、またトランスの設計もご自身で行うそう。またKT88やEL34などの、おなじみの真空管はあまり使われないうのだが、これについては「真空管を限定せず、供給数の多い真

空管やこれからも生産可能な真空管を探し、搭載するようにしています。これにより、他社モデルとは異なった音質へのアプローチも可能になります。他社に真似されることもありますが……」と、淡々と答えてくれた。

とにかく常に前向きで、エネルギーギッシュな開発姿勢には、本当に感心させられる。その氏の音の原点は、スタジオのアナログサウンドにあるという。そんなEARサウンドを知りたいという方には、最新モデルであり、日本限定バージョンのEAR834CUSTOMとフラッグシップモデル、EARV12をぜひ聴いてみることをおすすめする。EARの緻密で空間性のあるアナログサウンドが味わえることだろう。